

令和6年度 浜松市博物館事業評価

はじめに

当館では、令和2年に「浜松市博物館運営についての考え方」(図1)を定めている。その中では、博物館の使命(ミッション)を「浜松市域の文化の継承と創造」とし、令和7年度までの中短期目標を「継承」「連携」「創造」とした上で、それらを実現していくために必要な戦略指標を6つに分類して設定している。その戦略指標の達成状況を測るために事業評価を毎年行っており、ここでは令和6年度分の結果を掲載する。

1. 事業評価の方法

評価シートの作成と自己評価

戦略指標のうち、臨時的な整備事業に関する指標6を除く1～5の指標ごとに定量的評価と定性的評価の項目を定めた評価シートを作成した。定量的評価については評価項目ごとに目標値と実績値を示し、定性的評価については、各評価項目をA～Dの4段階で自己判定した上で、自己評価を記載した。

博物館協議会による評価

令和7年度第1回の博物館協議会において、令和6年度の事業報告と併せて評価シートを提示し、第2回協議会までに定性的評価A～Dの4段階評価と記述による評価・意見の提出を各委員に求めた。

第2回の協議会では、委員より提出された意見を取りまとめ、今後の事業の改善策や新たに行うべき取り組みなどの方策について、博物館側と委員との間で検討を行った。

2. 今後の予定

現在の事業評価は、令和7年度までの中短期目標を達成するためのものであり、令和8年度以降は新たな中短期目標を設定した上で、改めて事業評価の内容を変えていく必要がある(表1)。

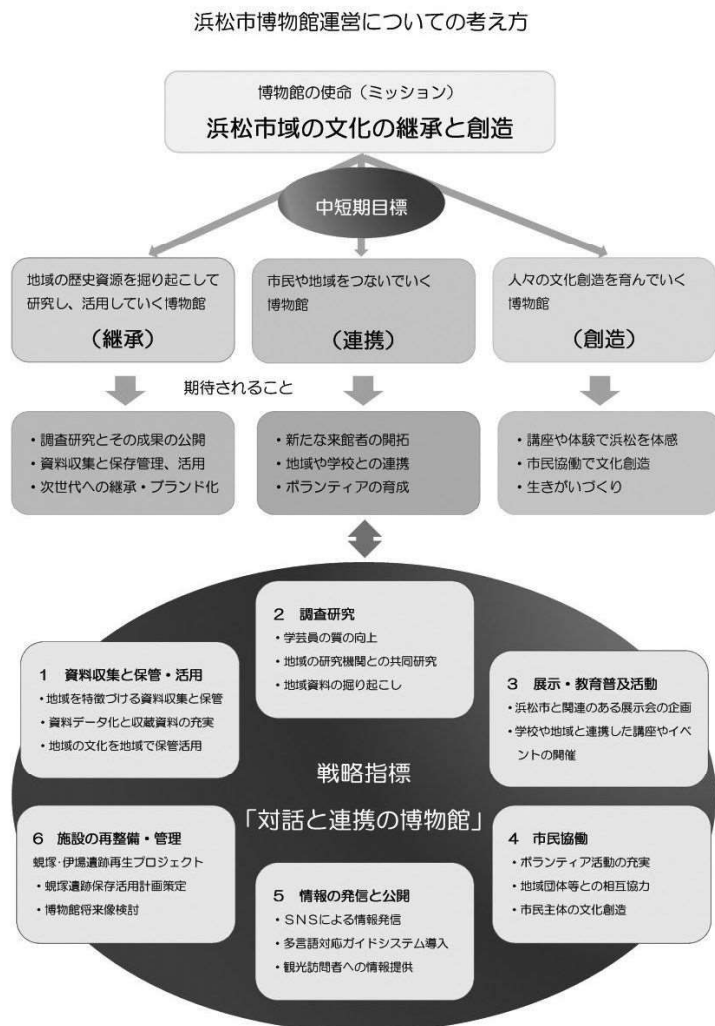


図1 浜松市博物館運営についての考え方

表 1 事業評価のスケジュール

年度	博物館協議会	内 容		
		令和6年度分事業評価	令和7年度分事業評価	令和8年度分事業評価
令和6年度	第3回		<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画案提示 ・評価項目、目標値等の検討 	
令和7年度	第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告 ・評価シート提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画説明 ・評価項目、目標値等の確認 	
		<p>↓</p> 各委員の評価・意見 (第2回の前に提出)		
	第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・委員の評価・意見のとりまとめ ・今後の事業の改善策や新たに行うべき取り組み方策の検討 		
				<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 2px; display: inline-block;">事業・事業計画等への反映</div>
	第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の方策をはじめとする事業評価の内容について最終確認 		<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画案提示 ・新たな中短期目標と事業評価の指標、評価方法、項目、目標値等の検討
令和8年度	第1回		<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告 ・評価シート提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画説明 ・新たな中短期目標と事業評価の指標、評価方法、項目、目標値等の確認
			<p>↓</p> 各委員の評価・意見 (第2回の前に提出)	
	第2回		<ul style="list-style-type: none"> ・委員の評価・意見のとりまとめ ・今後の事業の改善策や新たに行うべき取り組み方策の検討 	
				<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 2px; display: inline-block;">事業・事業計画等への反映</div>
	第3回		<ul style="list-style-type: none"> ・今後の方策をはじめとする事業評価の内容について最終確認 	

3. 事業評価の結果

(1) 指標1 資料収集と保管・活用

【定量的評価】

No.	内容	単位	R 4 実績値	R 5 実績値	R 6 目標値	R 6 実績値	考え方・基準・内容説明等
1	収蔵資料台帳のデジタル化件数	件	88,916	81,410	82,840	82,680	・年度末時点のデジタル台帳登録件数の累計。 ・舞阪町資料の台帳化が進められた。
2	新規受入資料の展示公開率	%	26	18	40	47	・R 5・6年度受入の公開可能資料のうち、展示、刊行物、オンライン等での紹介件数の比率。 ・R 5年度 5/11 + R 6年度 3/6 = 8/17 → 47%
3	収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数	件	12,004	11,996	12,120	-	・年度末時点の「ある蔵」公開件数の累計。 ・内容の重複、誤記等の修正のため休止中。
4	館内収蔵庫の点検清掃回数	件	12	12	12	12	温湿度等環境の点検及び庫内清掃の回数。 温湿度の点検を月に1回行い、清掃等を実施。
5	資料事故発生件数	件	0	1	0	0	資料の紛失、破損、汚損等の件数。

【定性的評価】 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない - 該当なし)

No.	評価項目	判断基準	R 5 自己 評価	R 5 委員 評価	R 6 自己 評価	R 6 委員 評価	自己評価理由
1	計画的な資料収集が行われている。	資料収集方針・資料購入基準に基づいている。	A	A5人 B2人	A	A7人 B1人	・方針・基準に基づき収集した。
		現状の収蔵環境を踏まえて、収集検討会議により受入を決定し、会議記録を残している。	A		A		・収集検討会議を毎回開催し、記録を残した。
		資料購入評価会の構成員を予め想定し、すぐに対応できるようにしている。	-		-		・該当案件がなかった。
2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	資料管理のフローチャートが運用されている。	B	B2人 C5人	B	B5人 C3人	・フローチャートに沿って実施。
		収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われている。	A		A		・キーボックスは施錠し使用時複数人確認。機械警備も実施。
		資料の収蔵場所を明確にするとともに、その場所への収蔵が確実にされている。	C		C		・原位置収納を複数人確認。
		全ての収蔵施設におけるデジタル台帳作成が計画的に行われている。	D		C		・以前からの混乱は改善途上。 ・台帳未整備施設のデジタル台帳作成を再開、途上。
3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	収蔵庫の温湿度を常に計測し、必要な措置を講じている。	B	B1人 C6人	B	B4人 C4人	・常時温湿度を計測し必要に応じて放熱や除湿を実施。
		全ての収蔵施設について毎年現地点検を行い、必要な措置を講じている。	B		B		・出先担当職員の協力を得ながら全施設で現地点検を実施。
4	収蔵資料の活用と見直しが図られている。	全ての収蔵施設の資料を把握し、将来的な再配置の方針が検討されている。	C	B4人 C3人	C	B2人 C6人	・外部収蔵施設の資料把握を実施中。再配置方針は今後検討。
		デジタルデータの公開活用が推進されている。	B		C		・「ある蔵」は修正により休止中。
		未整理資料や再整理を要する資料の活用に向けた確認・整理作業が推進されている。	C		C		・未整理・要再整理資料は把握しているが量が多く短期的解消は困難。
		他館への資料貸出、画像提供、資料熟覧への対応が内規に基づいて適切に行われている。	A		A		・適切に対応した。
		廃棄・移管・返却等に係る除籍手続きが基準に基づいて適切に行われている。	A		A		・基準に基づき、検討会議を開催し、1件の除籍を決定した。

【自己評価による分析・課題】

【収集】 収集方針・購入基準に基づき、収集検討会議を行い経緯や理由等の記録を残すなど適切に行った。収蔵容量が飽和している中で、緊急救出的に収集が必要な資料の受入判断が難しい。
【保管】 防犯体制の確保、収蔵庫の環境維持、資料の出納など現状の設備の範囲で可能な管理は行っている。外部施設を含めた未登録資料の台帳化、既存台帳の不備修正、不適切な取納状況の改善、飽和状態の収蔵施設の見直しなど、過去から蓄積した課題が膨大で、その解消には抜本的かつ中長期的な取組みを要する。
【活用】 資料の貸出、熟覧、画像利用などへの対応は適切に行われた。収蔵資料の検索システム「ある蔵」は内容に誤りが多く、修正のため休止が続いており、早期の復旧が必要である。

【博物館協議会委員の主な意見・評価】

【収 集】 ・資料収集とともに、社会状況の変化に伴う資料の滅失・散逸への対応を早急に検討する必要がある。
【保 管】 ・資料台帳整備のような重要かつ基本的な事業への人員配置や予算措置を講じる必要がある。 ・空調設備の必要性を設置者に強く働きかけ、文化財の保護のために必須であることを繰り返し伝える必要がある。 ・未整理・要再整理資料の再整理を計画的に進めること。 ・収蔵施設における点検および資料把握の作業は、大学と連携し学生の実習機会として位置づけることも一案である。 ・資料管理を専門にする部署（あるいは係）の設置、資料管理専従職員の配置など、組織体制から見直す必要がある。

- ・収蔵管理の重要性を市民に理解してもらいつつ、問題意識を共有する取組みを進めてもらいたい。収蔵庫の現状を公開し、資料整理のプロセスを展示で紹介するなど、飽和状態の収蔵庫改善に向けた取組みを実践することを期待する。
- 【活用】
- ・「ある蔵」再開への予定を示すことや、完璧な状態ではなくても利用できる方法を考える必要がある。
 - ・デジタルデータの利活用を図る上で、検索利便性と横断検索の可能性を備えた別の公開システムを検討してはどうか。
 - ・収蔵や公開におけるデジタルの推進をより一層進め、博物館の価値を高めてほしい。

【今後の方策】

- 【収集】・限られた収蔵容量を見据えながら、地域に残る歴史資料の滅失・散逸の防止に努めていく。
- 【保管】・台帳の整備や資料管理に人員と予算を重点的に配分し、最重要業務として推進していく。
- ・中長期的課題（未整理資料の整理、収蔵施設の再配置、収蔵庫の空調機能、収蔵容量の飽和状態）への対策を多角的な視点から検討していく。
- 【活用】・収蔵資料検索システム「ある蔵」の修正や利便性の改善を進め、資料情報公開のより良いあり方を検討する。

（２）指標２ 調査研究

【定量的評価】

No.	内容	単位	R 4 実績値	R 5 実績値	R 6 目標値	R 6 実績値	考え方・基準・内容説明等
1	学芸員が講演・講座等の講師を務めた件数	件	19	11	15	30	・外部での発表や講座も含む。連続講座は1回。 ・館内11件+館外19件=30件
2	学芸員の学術的著述の本数	本	6	5	3	3	・館報・図録・報告書、外部研究誌等へ著述本数。 ・学芸員3名各1本。
3	学芸員が調査に出向いた件数	件	27	35	20	41	・外部での資料調査、熟覧、視察など。同一調査に複数回でも1件。
4	他機関と連携した調査研究の件数	件	5	4	6	4	・大学、機関、研究者等との調査研究連携件数。 ・大学1件、研究グループ2件、他館1件。

【定性的評価】 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし)

No.	評価項目	判断基準	R 5 自己 評価	R 5 委員 評価	R 6 自己 評価	R 6 委員 評価	自己評価理由
1	調査研究が学芸員の重要な業務の一つとして位置づけられている。	調査研究とその他業務における適切な業務量の配分と分担がされている。	C	C7人	B	B6人 C2人	・業務量の配分も是正を進めているが、まだ資料整理の比重が大きい。
2	調査研究の環境が保たれている。	調査研究に必要なスペースが確保され、機材が適切に配備されている。	C	B2人 C5人	C	A1人 B3人 C4人	・館内の整理を進めた。 ・マイクロフィルムリーダーを更新。
		調査研究スペースにおいて整理・整頓が日常的に行われている。	C		C		・資料研究室と写場を整理。 ・整理・整頓は継続中。
3	調査研究が適切な内容・方法で行われている。	調査、視察、研修、有識者指導など学芸員の資質向上に必要な予算が確保され、積極的に活用されている。	B	A1人 B5人 C1人	B	B8人	・図書購入・有識者謝礼・出張等の予算は概ね確保され、有効に活用した。
		設定されたテーマに基づいて質の保たれた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している。	B		B		・型紙調査は報告書を刊行。蜷塚遺跡は成果をクリアファイルにした。
		学芸員が外部機関との共同研究に参画している	B		B		・「機械染色の型紙」は大学と覚書を締結して整理を実施。

【自己評価による分析・課題】

- ・学芸員が資料管理の改善に重点的に取り組む中で、調査研究スペースも十分ではない中でも、調査研究の重要性についての共有は図れてきた。講座の講師対応や学術的著述、資料調査は精力的に行われた。
- ・調査研究のうち「機械染色の型紙の整理・研究」は報告書、「蜷塚遺跡」は遺構配置を示したクリアファイルの販売で市民へ還元した。その他「伊場遺跡群」、「浜松城」、静岡文化芸術大学との「浜松の染色の型紙」共同研究など継続中の調査研究については、タイミングを見ながら成果を公開していく。
- ・外部機関との連携した調査研究は行われているが、担当学芸員の専門外の分野が多いこともあり、資料の提供や基礎作業が中心になりがちである。

【博物館協議会委員の主な意見・評価】

- 【位置づけ、時間や場所の確保】
- ・資料整理が、調査研究時間を圧迫しているのであれば、人員を増やすなどの措置をとる必要がある。
 - ・経験者等を非常勤で雇用し資料整理にあたってもらうなど、外部化をしながら調査研究時間を確保する必要がある。
- 【成果の還元】
- ・展示、報告書、論文、ギャラリートーク、SNSなどあらゆるチャンネルを駆使して、市民に向けて還元してほしい。
- 【質の向上】
- ・研究成果は、市民向け講座等にとどまらず、学会等での発表を通じて学術的評価を得ることを目指してほしい。
- 【外部との連携】
- ・大学との連携は今後も積極的に進めてほしい。

【今後の方策】

【調査研究の位置づけ、環境】
・引き続き業務全体見直しや館内の整理を進め、調査研究の時間と環境の確保に努める。
【成果の還元を含めた計画性】
・地域の特性や課題を調査研究のテーマとして捉え、市民への成果の還元まで含めた計画を定めることで、博物館における調査研究の重要性を内外に示していく。
【外部との連携・質の向上】
・引き続き、外部との連携、研修や研究会への参加、視察や資料調査、有識者招聘による指導などを通じて、知識・能力の向上やネットワークの形成に努める。
・中長期の調査研究を継続できる体制づくりに努める。

(3) 指標3 展示・教育普及活動

【定量的評価】

No.	内容	単位	R 4 実績値	R 5 実績値	R 6 目標値	R 6 実績値	考え方・基準・内容説明等
1	観覧者数（本館）	人	31,547	26,239	35,000	25,413	・資料点検を優先し、展示・教育普及を減らしたため。
2	観覧者数（分館）	人	22,859	17,599	13,000	9,129	・5館合計。浜北全長期休館による減。
3	企画展開催件数	件	8	6	7	8	・テーマ展2件、小展示6件。
4	企画展の満足度	点	7.7	7.4	7.7	8.1	・天竜川西岸の古墳時代8.24、近代の学校の姿7.92。
5	分館の企画展開催件数	件	23	7	11	11	・本館主体6件、分館主体5件。
6	講座開催件数	件	14	4	10	9	・講座6件、ワークショップ2件、見学会1件。
7	体験事業満足度	点	9	8.8	8.7	9.2	・アンケート平均値。GW8.8、夏9.1、冬9.1、春9.7。
8	学校移動博物館開催件数	件	9	10	8	10	・学校へ展示・体験学習で職員が出向いた件数。
9	教材貸出件数	件	94	92	100	86	・小学校77件、中学校5件、その他4件。
10	常設展の資料更新回数	回	5	4	3	6	・常設展内の展示更新の回数。
11	レファレンス対応件数	件	80	69	70	61	・来館、メール、電話等による件数の合計。

【定性的評価】 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし)

No.	評価項目	判断基準	R 5 自己 評価	R 5 委員 評価	R 6 自己 評価	R 6 委員 評価	自己評価理由
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市について理解を深められる。	常設展の魅力向上に取り組むとともに、多様性への対応（多言語・音声・ハンズオン・配置・文字サイズ・難易度等）を進めている。	C	B7人	C	A1人 B6人 C1人	・近世～近現代を全面更新。 ・多様性への対応がほとんど進められなかった。
		計画的な企画展の開催により、収蔵資料を効果的に公開している。	A		A		・コンコースにスポット展示コーナーを設けた。
		展示や教育普及事業において、デジタル技術を活かした効果的な事業展開を行っている。	B		B		・常設展に二次元コード導入。 ・講座配信や申込オンライン化。 ・双方向性の事業は未実施。
		速報展など時節や市民ニーズに即応した柔軟な事業展開を行っている。	B		A		・伊場遺跡群出土品の重文指定答申直後の速報展など実施。
2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われている。	各地域の特色を生かした常設展示が行われている。	B	B6人 C1人	B	A1人 B6人 C1人	・各地の文化財や歴史の展示。 ・更新をほとんどしていない。
		各分館の地域の人々や担当者の意見や要望が、企画展示等の事業に反映されている。	B		A		・各担当者と調整して企画展の内容を決定している。 ・各地域で自主事業を実施。
3	学校の学習内容に即した見学・体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	主に小学校3年生と6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが構成されている。	A	A5人 B2人	A	A5人 B2人 C1人	・3年生に昔の道具体験、6年生に遺跡見学や展示解説などを実施。
		学校のニーズ等を把握し、見学・体験プログラムの改善に努めている。	A		A		・移動博物館の学年ごと対応、学区の歴史資源の紹介等。
		デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めている。	C		C		・オンラインで学習素材の提供子ども向けHPは検討段階。
4	市民に学びの場を提供している。	来館者が理解を深められるオンラインの活用を含めた効果的な講座や展示解説等を開催している。	B	A1人 B6人	B	A1人 B7人	・講座のオンライン配信を推進。 ・教育普及事業が企画展や体験館開催時に偏りがち。
		博物館実習をはじめ、多様な研修を受け入れている。	A		A		・博物館実習、教員研修、中高生の職場体験等を受け入れ。
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験学習事業を行っている。	展示や講座等と関連付けた体験学習事業の開催により学習の相乗効果が高められている。	A	A5人 B2人	A	A8人	・銅鏡づくり、アイロン体験等常設展関連メニューのほか、企画展に沿った内容で実施。
		幅広い層が学びながら楽しめる体験学習プログラムを開発している。	B		A		・家族で楽しめる事業を実施。 ・講座と体験学習を組合せて実施。

【自己評価による分析・課題】

- ・観覧者数は、本館資料点検業務を優先し、展示や教育普及事業を減らしたことや、分館1館が通年で臨時休館を設定したことなどにより減少した。
- ・常設展は近世以降の展示更新など改善を進めているが、まだ途上である。企画展は計画通り実施することができた。
- ・分館の展示については、常設展示の更新まで手が回らないのが実情である。
- ・教育普及事業は、新たにさまざまな年代が参加できるような事業も試行している。
- ・学校連携事業は基本的に順調に行えている。オンライン活用があまり進んでいない(ニーズも少ない)のが課題である。

【博物館協議会委員の主な意見・評価】

【展示の多様性への対応】

- ・人口が多いブラジル人向けのポルトガル語の説明を加えたり、子どもや日本語学習者のために、展示の文字を大きくしてフリガナを振ったりする等は少しずつできるのではないかと。国際交流協会等へ協力依頼することも考えられる。
- ・多様性への対応に本格的に取り組む場合は人材の育成・採用が必要。予算措置・研修制度等の準備を進めてほしい。
- ・常設展示は博物館の王道である。10年変わらない同じ展示内容だと陳腐化は避けられない。

【分館】

- ・各分館の常設展示は更新が滞り、企画展も十分な成果に結びついていないように見受けられる。大学と連携し、学生の実習機会として企画展の企画・実施を検討してほしい。
- ・分館の各担当者や指定管理者が自主事業を実施していることは評価できる。

【体験学習等教育普及】

- ・博物館の来館者として高校生が少ないため、体験・見学プログラムを中学校・高校へ拡大できるとよいのではないかと。
- ・外部団体との連携や館外での企画等に工夫が見受けられる。引き続き地域に根ざした関連イベントの実施に期待する。

【学習の場の提供】

- ・学校と博物館は多くの場面で連携しており、教職員も有意義な研修の機会が提供されている。また、休日や学校の長期休業期間中に開催される体験活動などに、保護者とともに多くの児童が楽しく参加していることは評価できる。
- ・中高生に「学芸員」という職業があることを知ってもらうことも必要。そのためにもオンラインの活用推進が必要。

【今後の方策】

- 【常設展】内容の更新に継続的に取り組みながら、多言語化など多様な観覧者を受け入れられる展示手法を整えていく。
- 【企画展】市民のニーズを踏まえつつ、資料整理や調査研究の成果を活かして企画展を開催する。
- 【教育普及】外部とも連携しながら、幅広い層に届く工夫を行い、浜松の歴史の魅力を幅広く伝えていく。
- 【学校連携】校外学習の来館を促進しながら、移動博物館や職業体験、ICTなど学習手段の多元化を進めていく。
- 【分館】地域や学校等と協力して、分館や収蔵施設で地域に根ざした展示・教育普及を進めていく。

(4) 指標4 市民協働

【定量的評価】

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準・内容説明等
1	地域団体等と連携した事業の実施件数	件	3	3	3	4	自治会や市民団体等との連携によるイベントなど。自治会3件、市民団体1件。
2	市民参加型事業の開催件数	件	2	0	2	0	共同調査、意見聴取型WS、協業などの件数。
3	出張展示開催件数	件	1	1	3	2	外部の依頼による出張展示。図書館1件、金融機関1件。
4	出前講座等開催件数	件	11	7	10	31	依頼を受けて講座に出向いた件数。
5	他団体共催事業件数	件	3	1	5	4	展示、講座、イベント等。ツーリズムビューロー3件、市民団体1件。
6	ボランティア参加延べ人数	人	356	357	450	348	ボランティアの延べ活動人数。主要活動の体験学習を減らしたことによる減。
7	ボランティア養成事業開催回数	回	10	5	6	4	講座、報告会、実習等の資質向上に関する事業の開催回数。研修3回、説明会1回。

【定性的評価】 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし)

No.	評価項目	判断基準	R5 自己 評価	R5 委員 評価	R6 自己 評価	R6 委員 評価	自己評価理由
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めている。	B	B7人	B	B8人	<ul style="list-style-type: none"> ・チラシやHP等で募集、講座で育成、教育普及の補助やガイド等を実施。 ・人材や内容の固定化、高齢化が課題。 ・教育普及では運営補助を条件に優先的に参加させている。 ・ボランティアの企画提案は少ない。
		ボランティアにインセンティブや企画提案の場を用意するなど意欲向上の取り組みを進めている。	B		B		
		シテプロモーションを意識した事業展開を官民連携も含めて進めている。	B		B		
2	博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	市民団体等に博物館や蛸塚公園でのユニークメニューを促進している。	B	B4人 C3人	B	B5人 C3人	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚式や七五三の前撮り、コンサート等行っているがルールが不明確。 ・障害者等の受け入れはソフト面で個別対応しているが、ハード面に遅れ。
		社会の課題解決に向けた事業展開を図っている。	C		C		

3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	地域住民の活動の場として博物館や蛸塚公園が有効活用されている。	B	A1 人 B5 人 C1 人	B	B8 人	・自治会イベントに会場を活用しているが、ルール等が明確でない。
		地域との連絡・調整体制が築かれている。	B		B		・自治会会合に出席し関係者と随時連絡もしている。
4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	分館事業に対する感想や各地域の要望を把握し、課題改善に努めている。	B	B5 人 C2 人	B	B8 人	・分館担当者を通じて要望を把握しているが、届きにくいこともある。
		分館担当者や指定管理者との定期的連絡・調整の場を設定している。	B		A		・定期的に担当者会議を行うほか、個別の連絡や打合せも適宜実施。

【自己評価による分析・課題】

- ・展示解説や体験学習など、市民が主体的にボランティア活動や事業に参画する場を設けている。若年層のボランティアも一定数存在するが、主力層の高齢化が課題となっている。蛸塚遺跡のガイドが現状で不在なのも課題である。
- ・地域でのアウトリーチやユニークメニューの開催は、一時期より要望が増えているが、促進を図るためのルール等が明確になっていないのが課題である。
- ・各分館では地域に根差した事業が展開されているが、運営主体の取り組みに差は生じている。

【博物館協議会委員の主な意見・評価】

- 【ボランティア】
- ・魅力的な活動を行い、幅広い年齢層が参加できるような敷居を低くする取り組みを実施してもらいたい。
 - ・新陳代謝を図るため、年制限の導入や公募の方法を見直すなど、改善に取り組んでほしい。
 - ・ボランティアに企画提案をしてもらうには、高度な養成が必要で、育成や管理にも専任の職員が必要。
 - ・近隣自治会と良好な関係を保ち、活用も進んでいることは評価できる。それをボランティア拡充につなげられないか。
 - ・近隣に浜松学院大や浜松北高校、浜松市立高校等があるので、大学生や高校生も気軽に参加できると良い。
- 【社会の課題解決】
- ・音声ガイドやハンズオン等は、導入の必要性についてエビデンスを用いて確認し、予算を確保していく必要がある。
 - ・障がい者等の受入れは、今後の博物館運営において不可欠の課題である。できるだけ早期に改善してほしい。
- 【アウトリーチ】
- ・出前講座等の開催件数が非常に多く、博物館からの情報発信が熱心に行われていることは大いに評価できる。
- 【文化創造】
- ・ピアノコンサートや撮影での活用等、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している点は評価できる。

【今後の方策】

- 【市民協働】
- ・現状のボランティアの従事内容の検証を進め、募集方法や意欲向上の取組みの見直しを図る。
 - ・館内や史跡公園の利用ルールを定めた上で、利用促進のための取組みを行う。
 - ・分館や地域との対話機会を増やし、地域での協働について調整を図る。
 - ・アウトリーチを積極的に行いながら、その機会に地域の課題や希望などの把握を図る。
- 【社会の課題解決】
- ・館内環境の向上を現状でできる範囲で行い、どのような人でも快適な来館となることを目指す。
 - ・現代社会における課題について、地域の歴史と結び付けた事業の展開を図る。

指標 5 情報の発信と公開

【定量的評価】

No.	内容	単位	R 4 実績値	R 5 実績値	R 6 目標値	R 6 実績値	考え方・基準
1	SNS フォロワー数	回	1,936	2,142	2,250	3,269	X、インスタグラムの年度末時点のフォロワー数。
2	HP アクセス数	件	85,522	68,719	86,000	175,124	博物館 HP のトップページアクセス数。
3	アップした動画の平均再生回数	回	391	635	500	712	年度内に公開した動画の年度末における再生回数平均値。
4	報道取り上げ回数	回	52	32	50	71	新聞・ラジオ・TV・雑誌等の取り上げ回数。 TV：8、ラジオ1、雑誌14、新聞26、ネット22

【定性的評価】 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし)

No.	評価項目	判断基準	R 5 自己 評価	R 5 委員 評価	R 6 自己 評価	R 6 委員 評価	自己評価理由	
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	過去の実績やアンケート等に基づき、事業の規模や対象に合った情報発信手段を適切に選択している。	A	B5 人 C2 人	D	A	・内容により配布先や部数を変え、速報性の高いものはインターネットを中心に実施。	
		収蔵品検索システム「ある蔵」の、内容の充実と見やすさの改善に努めている。	C				D	・掲載内容に一部不備があり、抜本的修正のため R 6 年度は休止中。
		積極的な報道発表を行い、報道機関を通じた情報発信に努めている。	B				A	・市政記者クラブのほか、インターネットメディア等にも情報を提供した。

2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	展示解説やパンフレットなど多言語化への対応を進めている。	C	B3人 C4人	C	B4人 C4人	・常設展を一部修正したが、音声ガイドやパンフレットは未作成。
		観光施設や宿泊施設等との連携を深め、博物館の広域的な周知に努めている。	B		B		・チラシ等の配架依頼、SNSの相互フォローなど連携しているが、新規の相手を増やせていない。
		地域の魅力を紹介することで、地域に対する関心を高めることができたか。	B		B		・各地域の歴史資源や資料の紹介に努めたが、来館に十分つながっていない面がある。
3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	刊行物（図録、博物館報、博物館だより、博物館情報等）が計画通り発行されている。	A	A1人 B6人	A	A3人 B5人	・計画通り発行した。
		HP等における事業の動画や資料、収蔵品の情報などにインターネットを活用した来館できない人向けの情報提供に努めている。	B		B		・講座の動画配信を実施。 ・浜松文化遺産デジタルアーカイブで資料の公開とフリーダウンロードを実施。 ・来館できない人向けのインターネットでの展示紹介等が不十分。
		SNSでは事業の開催周知だけではなく、日々の活動状況も公開することで、博物館事業への理解が深められるように努めている。	B		A		・学校移動博物館の様子や販売品の紹介のほか、調査研究や研修など普段市民の目に触れない情報を発信した。

【自己評価による分析・課題】

- ・来館者アンケートの結果からは、来館者の情報源はチラシや広報はままつなど、紙媒体の方が依然として多いが、徐々にインターネットの情報で訪れる人も増えている中で、HPやSNSなどオンラインによる効果的な周知には至っていない。
- ・公開されている収蔵品検索システム「ある蔵」は、見やすさ、使いやすさの面でやや使いにくい面が残るとともに、点検作業の中で記載内容等に不備が一部見つかり、休止して修正を行っている状況である。

【博物館協議会委員の主な意見・評価】

【SNS等の発信】

- ・インターネットの情報で訪れてくれる人がもっと増えると良い。若い人に見てもらえるようにSNSのさらなる活用を。
- ・中長期的な視点で博物館のファン層を増やすため、コレクションや遺跡に関する学術情報を配信してもらいたい。浜松の歴史裏話や文化財の最新研究をわかりやすく、学芸員の言葉で語りかける取組を地道に続けることが肝要。

【多言語化】

- ・外国語による音声ガイドやパンフレットの整備について、今後の作成を期待したい。

【刊行物】

- ・刊行物の魅力をウェブページ上で発信するなど、来場したいと思わせるアピールにつなげることができればよい。

【収蔵資料情報の公開】

- ・「ある蔵」が休止中であることは非常に残念である。早急に復帰する必要がある。
- ・「ある蔵」の休止について、他のシステムの導入を進めるのか、「ある蔵」を再開するのか、優先的に検討すべき。

【教職員への発信】

- ・教職員が使用するタブレットパソコンから直接博物館にアクセスできるようになるとよい。

【今後の方策】

- ・紙媒体とインターネットを使い分けあるいは共有化して、より効果的な方法を考えながら情報を発信していく。
- ・収蔵資料検索システム「ある蔵」は早急に内容を修正するとともに、別に活用している「はままつ文化遺産デジタルアーカイブ」「文化遺産オンライン」との役割分担を行っていく。
- ・SNSは、市の運用ルールに基づきながら注目される記事を作成し、閲覧者の増加を目指す。また、博物館の通常市民の目に触れない業務なども積極的に発信していく。
- ・多言語化は外部との連携を進め、音声ガイドやスマートホンの解説アプリなどにつなげていく。
- ・教員や児童生徒が学校で利用しやすい情報の公開・発信方法を検討する。
- ・刊行物は、販売状況を見ながら、HPや「全国文化財総覧」へのPDF掲載を進めていく。

おわりに

当館の事業について、博物館協議会委員から忌憚のない評価や意見をいただいたことで、更に伸ばすべき点や改善を要する点が明確になった。また、本館が抱える課題に対して幅広くご提案もいただいた。この事業評価の結果から目標の達成状況を確認し、今後、当館をより良くしていくための指針として活用していく。

なお、本館の事業評価は、評価項目や目標値の設定等に修正の余地が残されている。令和8年度からは新たな中短期目標のもとでの事業評価も開始される。今後も博物館協議会等の意見を受けながら、絶えず有効な事業評価となるように見直していく必要がある。